

騒音が聴覚発達に影響も

保育園児たちの元気な声が施設によっては室内の騒音と化し、保育に支障を来すケースまで出ている。専門家は、騒がしさの中で長時間過ごすこと、子どもの聴覚の発達や働く保育士の健康に悪影響を与えかねないと指摘。日本建築学会は保育所の音環境に関する具体的なルール作りを進めている。

保育所の音環境に注意を

「室内がいつもザワザワし、子どもたちは落ち着きがなくなる。保育士たちは大声を出すため喉を痛め、疲れ切っています」と、由紀副園長は2013年に新園舎に移転後の「異変」を振り返る。玄関の吹き抜けやワ



吸音材が設置され、音が響きにくい保育室で、体育やはさみを使った作業にそれぞれ励む練馬二葉保育園の園児ら(写真はともに東京都練馬区)



壁につるされた丸形の吸音材を説明する練馬二葉保育園の堀内由紀副園長

建築学会がルール作り

ンルーム型の保育室、多くの窓と開放的な造りで、完成直後から音がよく響くなど感じていたが、相談した志村洋子埼玉大名教授らによる音の計測結果に驚かされた。

「室内の音量の平均値は80〜90デシベル。地下鉄の車内や騒々しい工場に匹敵するうるささです」
長年、幼児施設の音環境を調査してきた志村教授からの提案は、天井や壁に吸音性の高いガラス繊維「グラスウール」などを設置する対策。17年の施工後は80デシベルを超える時間が減った。堀内副園長は「遊びの集中力が高まり、保育士

は叱ることもあまりなくなりました」と効果を実感する。

「最近では園舎の新築に伴う相談が増えている」と志村教授。別の園での調査では、一日の終わりに保育士5人全員の聴力が低下したといい、子どもの育ちへの影響はさらに大きいと危ぶむ。「幼児は周囲のさまざまな音の中から必要な音や言葉を聞き取る能力が未熟で、会話も成立しない騒音下では言葉の習得にも支障を来しかねない」

日本建築学会に所属する明治大の上野佳奈子専任教授は「『子どもの声がつるさしい』という言い方は保育文化になじまず、『元気で良いね』で済ませがち」と指摘する。一方、欧米諸国では乳幼児の聴覚発達などに適した保育空間作りが重要視され、施設の音環境に関する規格や基準があるといい、同学会の川井敬二熊本大教授らと共に、国内での基準作りを急いでいる。

基準は来年公表予定で、保育室や遊戯室などに必要な音響性能の推奨値について、騒音レベルと、短い方が言葉が聞き取りやすい「残響時間」を示す。

上野教授は、待機児童対策が進む中で、音環境に配慮する必要性が増しているという。「振動で電車の進む方向まで分かるような高架下や、壁が作れず全年齢がワンルームで過ごすビルのテナント内などにも保育所ができていく。『基準』に法的拘束力はないが、子どもたちが一日の大半を過ごす場所の改善に、少しでもつなげれば」と話す。